
博士と私達

黄黒真直

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

博士と私達

【Nコード】

N1268X

【作者名】

黄黒真直

【あらすじ】

日本のどこかにある研究所で、「博士」と「私」が延々と会話を続けるだけの話。科学知識がそこかしこに登場しますが、適当に書いてるだけなので信用しない方が身のためです。1話完結、不定期連載。むかーし書いてネットの掲示板に載せた話を、細々と転載していきます。各話のあとがきに書かれているのは、執筆時期。

博士と私

「本格化する地球温暖化を前にして、物理学者である我々に何ができるか」

「突然どうしたんですか、博士」

「僕は問いたい」

「私にですか」

「他に誰がいる」

「博士が」

「今のは独り言だと？」

「博士、疲れるとよく独り言いうじゃないですか」

「うむ。君の観察は実に正しい。だがこれは独り言ではない」

「そうですか」

「で、どう思う」

「そうですね。物理学と言う立場からすれば、今までとは全く違う熱機関の開発が可能でしょうか。

現在のところ、化学の方面から、いわゆるバイオマス燃料が開発されていますが、

我々は燃料ではなく、機械の方を改良できるでしょう」

「ふむ、実に君らしい、わかったようなわからないような回答だ」

「私にはわかるので大丈夫です」

「それではダメだ。科学の世界では、相手に理解されない理論は存在しないに等しい」

「別に、博士に理解してもらおうとは思っていません」

「そうか」

「そうです。…で、どうして突然そんな話をしだしたんですか」

「気になるか」

「気になります」

「そうかそうか。気になるか」

「早く言ってください」

「そんなに言って欲しいか」

「やっぱりいいです」

「……いや、聞いてくれないか」

「聞いて欲しいんですか」

「ああ」

「わかりました」

「よかった。見てくれ、僕の白衣を」

「びしょびしょに濡れていますね」

「何故だと思う」

「先ほど、土砂降りの雨の中、走って帰って来られたからですね」

「そうだ。何故今日のこの時、この瞬間に、この突然の夕立が起ったのだろうか」

「私は知りません」

「地球温暖化のせいだ」

「は？」

「地球温暖化によって雨が増える事は、シミュレーションでわかっている。

故に、この雨も地球温暖化によるものだ。だから僕の白衣が濡れたのは、地球温暖化のせいなのだ」

「……………」

「今一度問いたい。本格化する地球温暖化に対して、物理学者であ

る我々に何ができるのか」

「博士。今はいい折り畳み傘が100円ショップに売っています」

「うむ。それが僕の求めていた答えだ」

博士と私（後書き）

2007年 梅雨

博士と私パート2

「博士。ちょっとよろしいでしょうか」

「なにかね」

「研究所の電気代なんですが、今月はいつもより十万近く増えています」

「ふむ。何故だろうな」

「これから夏になったら、さらに冷房代までプラスされるんですよ。なにが原因で電気代が増えたのか、早めに調べておいた方が…」

「原因はわからんが、冷房代に関しては心配ないだろう」

「何故ですか？」

「君は『冷たい熱エネルギー』というのを知っているかね」

「は？」

「知ってるのかね、知らないのかね」

「知らないと答えるのが不本意なので、少し考えさせてください」

「意外に可愛いところがあるな」

「別に可愛くはありません」

「いやいや可愛いぞ」

「黙ってください」

「わかったから顕微鏡を振り回さないでくれ」

「で、冷たい熱エネルギーですか」

「そうだ」

「普通熱エネルギーといえば、温度が高くなると大きくなりますよね。冷たいのなら、エネルギーは低い事になる」

「高校物理だな。その通り。だがその低いエネルギーが今、環境問題の観点から注目されている」

「低エネルギーが？ なにに使うんですか？」

「降参か」

「……で？」

「冷たい熱エネルギーと言うのは、雪や氷の事だ」

「は？」

「いや、本当だ。冬の間、北海道や東北地方などに降り積もった雪を巨大な魔法瓶に入れて取っておき、

それを夏になったら使おう、と言う案だ」

「ああ、なるほど」

「そうすると、いままで捨てる場所に困っていた雪を集める場所が作れるうえ、

夏にそれを利用する事で省エネになり、一石二鳥なのだ」

「それは知りませんでした」

「それで話を戻すと」

「何の話でしたっけ。――電気代の話でしたね」

「ああ。この部屋は涼しいと思わないか」

「冷房つけてるんじゃないんですか？」

「いや。そんな事をしたら電気代がかかるし、省エネにもならない」

「それじゃあ、冷たい熱エネルギーを？」

「その通りだ」

「でも、この辺、冬に雪なんて降りましたっけ？ 東北から輸入したんですか？」

「まさか。作ったんだよ。それも、雪より冷たいやつを」

「は？」

「見たまえ、この水槽一杯の液体窒素を！　これを先ほど、部屋全体に撒いたのだ。」

コップに移して部屋中に置くだけでも、随分涼しくなるはずだ」

「……これを作ったって、どこで？」

「あれ、知らなかったかね。うちの研究所には液体窒素製造機があるのだ。」

まあ、ここ最近使ってなかったから知らないのも無理ないかもしれないが」

「博士」

「なにかね」

「今月の電気代が跳ね上がった理由、それです」

博士と私パート2（後書き）

2007年 初夏

博士と私パート3

「博士。手紙が届いてます」

「ほう？——おお、研究仲間からだ」

「なにか発見でもしたんでしょうか？」

「どれどれ…お？ 結婚式の招待状だ」

「は、結婚式？ このトシで？」

「彼は若いよ。まだ30前だったはずだ。そうかそうか、遂に結婚するのか」

「行くんですか？」

「ああ、そうするつもりだ」

「…そういえば、博士は独身なんでしたっけ？」

「そうだ」

「どうして結婚しないんです？」

「…………。平凡原理、を知っているかね？」

「まあ、そのぐらいなら私も。『全ては平凡である』と言う原理ですよね」

「そうだ。この宇宙において、特殊な現象は何一つとして存在し得ない。」

君が10メートルの高さからボールを落とせば、それは1.4秒後に地面に落ちるし、僕が10メートルの高さからボールを落としても、また然りだ」

「でしょうね。でなければ困ります」

「だからみんな、宇宙人がいると信じている。この地球に生命がいるのだから、他にもいたっておかしくない。それが知的生命体であるかどうか、そうであったとしてどのぐらいの知性を持ち合わせているか、は抜きにして、『地球外生命体がいる』という事に関しては、いまはあまり異論が出ていない」

「現に木星の惑星・エウロパに生命がいるんじゃないか、ってみんな真剣に考えてますものね」

「ああ。平凡原理とは、ある意味、全ての科学における暗黙の了解ともいえる」

「……で、それと結婚しない事に何の関係が」

「君はおかしいと思わないかね」

「何がです」

「みんな何故恋人は1度に1人しか作ってはいけない、と考えているのか」

「は？」

「仮にある男性が好きになる条件がAだったとしよう。そして目の前に、まさにAである女性が現れる——しかし平凡原理によれば、ある1人の女性がAであるならば、他の別な女性もまたAである、と言える」

「はあ。ま、そうですね」

「仮に、Aと言う条件を満たす女性がこの世に……この地球上に1人しか存在しないとしよう。

しかしそうすると、その男性がその女性にめぐり合う確率は、単純に考えても60億分の1になってしまう。そんな確率は0と言ってもいい」

「……なんとなく、博士の言いたい事がわかってきました」

「しかも、そのAと言う条件を満たす女性が、その男性を好きになる、とは限らない。

仮にこの女性が好きになる条件がBだとして、男性がBである確率はいかほどか？」

「低いですね」

「だろう？　するとこの世にカップルなど存在しない事になってしまふ。だがこれは事実と反する。

よって背理法により、Aと言う条件を満たす女性はこの地球上に少なくとも2人、存在しなければならない」

「それならば、この男性は同時に2人以上の女性を好きになっても

おかしくない、いや、ならなければならない、と言う事ですか？」

「その通りだ。なのにみな、それを許さない。このような非論理的な事は僕は好きではない。だから結婚はもちろん、恋人も作らないというわけだ」

「はあ。でも博士」

「なにかね？」

「博士は別に、結婚しないんじゃない、結婚できない、のでは？」

「……………」

「……………」

「……………!!!!」

「!?!?!?!?!」

「~~~~~!!!!!!」

「ごめんなさい博士。私、まさか博士に傷つくとか、悲しむとか、そういう人間的感情があるだなんて思ってたんです。

そうですね、この世に特別な存在なんていないのですから、博士も人間的感情を持ち合わせてますよね」

「そうだ。それこそが暗黙の了解だっ」

「ですよ、ごめんなさい。元氣を出してください。

そうだ、今度一緒にどこか食事に行きましょう。ね、博士」

博士と私パート3（後書き）

2007年 夏

博士とあたし

「たーまやー」

「たーまやー」

「綺麗な花火ですね、博士」

「ここらで一番大きい花火大会だからな」

「ホントに綺麗な炎色反応！」

「これは花火だよ」

「炎色反応ですよ。あ、あたし、あのバリウムの色が好きだな」

「うむ、綺麗だな、緑」

「それからあの銅の色」

「うむ、綺麗だな、青」

「博士。もっと普通に楽しましようよ」

「君の方こそ、楽しんでるのか？」

「楽しいですよ。うわあ、おっきな花火。直径どのぐらいなんだろう？」

「君はどこか変わってる」

「そうですか？ あ、博士、大きさ分かります？」

「簡単だ。花火が爆発してから音が聞こえるまで約1秒…。つまり、花火からここまでの距離は約300メートル。そして…」

「腕なんか伸ばしてわかるんですか？」

「腕を真っ直ぐ伸ばすと、こぶしの一番下から一番上までの角度が、だいたい10度になる。」

それを利用すると…花火の一番下から一番上までが、約40度」

「と言う事は、花火の中心から花火の端までの角度は20度って事ですね」

「その通りだ。つまり花火の直径は、300メートルかけるタンジエント20度かける2で…」

おい、誰か関数電卓持ってないか？」

「……ちよつといいですか、仲のいいお2人さん」

「なにかね」

「私たちもいるんです。もっと普通に楽しめないんですか？」

「楽しんでますよ。ね、博士？」

「ああ、もちろんだ。……わかった、わかったから、関数電卓を振り回さないでくれ。と言うか、持ってるじゃないか！」

博士とあたし（後書き）

2007年 真夏

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1268x/>

博士と私達

2012年1月5日23時47分発行